



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国民社会の研究 第18巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木栄太郎著作集 7（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内での言及による）。
Issue Date	1962-05-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77583
Type	manuscript
File Information	I021_0118.pdf



18

Standard Note

MADE OF FINEST PAPER
PREPARED IN TOKYO

國民社會研究
第十八卷

昭和三十一年一月一日

ESD
WA
30

ES

国策パルプ専工場特選紙使用

ESD - NOTE

18

一 余の口民社会形成力説すゝ夫	1
一 社会的地位と役割	5
一 役割とは何か	8
一 位階と職分	10
一 日本の口民社会の気風 (特輯) は如何なるものであるか	11
一 津田幸吉における口民社会	16
一 津田幸吉の批判	18
一 日本の経済と口民社会	20
一 日本文化の南北型・西南型の二気風	21
一 批判	21
一 都市は統合機会の集合体と見えてくる批判	22
一 都市化の日本的特徴と社会的	24
一 合同支那と支那文化の大勢力	27
一 支那都市形成による口民社会	28
一 の研究協力の方針	31
一 日本文化の特性	31
一 日本人の天分	38

余の「口民社原不現」で力説する大

一、口民社原不現の原理

イ、テリトリー論

行政区域制と

口民社原不現の整理と統治文化

の永久継続性

ハ、先覚者の役割

一、村落都市の連続と展開

一、統治文化の連続と変容の
連続

イ、政治交代における統治文化の付

政

四、文化活動の拡大と樹枝状組織の形成

(五) 統治文化と都市の配置

(六) 経済活動と他の活動

樹枝状構造を伴う

ここに日本統治時代の状況

や日本人意識の形成の状況

一、国民生活における勢力の拡大

これは大政翼賛と大企業協会の関係

一、大政翼賛と大企業協会の関係

（及大改革の

四、大企業株主の地理的分布

ハ、首都の地位と役割

一、市民社会の形成構造

1. 社会の骨格の構造としての社会構造

2. 政治的、商業的、工業的機関の配

置に市民社会活動の骨格を認め

る必要がある。

一、アメリカの都市化と日本の都

市化の別

一、市民社会の形成

1. 社会構造の形成と発展

2. 官僚の下部組織

八、口家哲を批判
在、口家の申附様
ホ、口家の元
フ、口家の元
ト、口家の元

(二六六)

都市的地位と役割

都市はその都市だけでなく都市ではなく口民衆の諸都市の中にある。その都市の地位があり役割がある。

その都市内の中の集団もその都市内の社会の地位があり役割がある。但たの都市の中の各人の地位もあり役割がある。

かくの如き社会的地位と役割は階層的にも地位と役割もある。地位と役割があるのは階層的構造内にあるものではない。

同一階層の中にもそのれくの位
視と行動をもつ他人の又は異位
的組織の國家した組織と活動
がある。

位階と行動は階層構造の内
に又あると思ふた。大同達して
ある。同一階層に居る人々の同
じものような民を制する位階
と行動は國家的である。

「国政」における東京市のstatusとroleの組織より見た東京市の分類」
この国政の内の東京市は次の様に分類が合理的である。

- 一、国政を中心都市（首都）
- 二、地方中心都市（府、市、町、村）
- 三、中小都市（デパートのある市、ない市）
- 四、特権的都市（東京人口の5%以下を含む都市）
- 五、村荘（東京人口の5%以上の市、町、村）

援國とは何か
トモトモ

機關とは社会的に公認されそ
の活動が一定の社会的役割を
果たすものとして期待される
いゝ生業の本據である。機關は
生業活動の中心は平易の單位
を有するものであつた。その單位は
他人の生業であり、より多数
者の生業協力体である。とり
あへず。

平化の発展と共に生業協力体は
常に大多數者の協力体となり
都市の近代化は大協力体の機關

の
増
加
を
収
束
し
て
い
く

位階と職分

国家の内にも村にも都市にも
□ 氏名にしろ住所の異なる
をなすものの位階と職分がある
この相互にそれを見分けて活動し
てゐる。それこそ秩序ある。位階
や職分は上下の階級の中にもあ
る。横の階級の存在もある。それ
は status とは何か、
家の内にも異なる他人であり、
この異なるは世帯であり都市下の
異なるは様相である。□ 氏名
この異なるは村と都市である。
三三三

日本の口民死すの特徴は

奴隷的である

日本の統治文化は征服者と被征服者の同化の中に成長してつづいて、口民は統治者の前に奴隷に降参。無力で屈服する以外に力を村たぬ。

村落において村人は自治の一片の力も持つて居るといふ上、定められた道に従うべきが失つて行く。一つの道である、自分達の中心を常に考へることは上にならず、毛神も失ふらしいのである。それ

は打つ首に寸分もかし氣をぬとるの
以人権を違ひしつゝいる。と云ふ統治
組織のことも上と民との関係は
いつも同じである。日本の統治組織
は全くよく出来てゐる。戸籍制は
の整備が常に國民を多力にして
来た。戸籍制がもとより國民
組織によつて國民は常に捕縛を
かけられて生活するから

朝鮮の契には村落自治のための契
は日本の諸には村落自治のための契
は無い。村人全員加入の諸は

あつたか。それだけ仰を共々へす。
人々の地位仰のみの御力の満である。
朝鮮の洞契は洞長の治安の
みの契である。村長を維持し
洞長の生活秩序を絶えず守持
す。よんで洞長を守るのは洞長の
家長の力であるとする考えと上の
統治は服しなさいといふ目録より
から明するところ非之と官吏の
別はあつても村人は平等であるといふ
み見方が得る。両派は階層として上
位にあるか、祖先の内に属した人かあ

に就いてそんな感じをもちつゝゐる。実
をいへば政変に及んだるまで世間の形は偉
大といふ國に等しい人の手を取り合つてゐる。

津田史をいふ。皇室

皇室は国民の内部にあって民族の精
神の中心点となすものとし「皇室の
万世奉てある根本的理由はここにあり
」
「国民の団結の核心であるが、こゝろ
に氏と共に国民と共に永久なるであら
う」
神代史の新しき研究（一九九頁）（朝日新聞）
1963.3.24 p.92
民族的精神の中心点を作したものの
史実を津田氏はどんな風に実証し
たか。そこが大問題である。国民の団結
の核心を作したものの史実を著末ま
での史実の中に実証する。かゝる事

はこの意見は正しい。

永い武の統治時代には皇室は口民の
心にとんだ形で生きていて力をそそ
ぐお方を明かにするは是れが
要である。

口民の生活は
當時
口民の生活は
口民の研究では皇室は老練な
方であつた様に述べてあるが
である。そこが同じである。正しい
史の採用の表を却に望むものがある。

三八三三

津田史を批判

各民族の特殊性が強調され各民族
の文化的存在と民族が將來を
決定するものと見做されてゐる。各民族の
歴史に共通な法則性を見出すこと
は重視であるが、文化的交流が漸
次加はるにつれて素朴な漸次同じ
秩序の中に向つていふことも見出し
がたつてゐる。民族の合理的代
の進歩性が歴史発展の道にあるといふこと
がほゞつゝある。それは何れの民族にも
共通に見えぬものであり、民族
化といふ語は人道的なものであるが

19

為 の に 合 致 す べ し

日本の統治文化

日本の統治文化の形成には次の三要素が
主としてあったと考えるのがよい

一 戸籍法

二 地区社会制

三 島口による口境の隔絶

四 兵器の独占

日本文化の東北型・西南型の二元論の
批判

契丹・清など根深い文化の特性を
同化してしまっている。東北の漢人
者には朝鮮の偉人々と近づいてい
た人があつたにすぎないのだから。

都市は統合機関の集合体である

その役割

矢張り、都市の統合機関の概念は
統治機関より同一ではない。これは
とし、中央的統合機関（それは
政治的機関を当然に意味する）か）
の傘下にあるものに協力して
その種の機関より統合機関と
見られる。都市は集まるべき
機関は皆中央的機関に協力
している。ばかりである。それ外
にない。銀行、商店、教育、
娯楽の機関等々も同じである。

この同型は口実をえ現論の
考へに對する大なる反論の
一つとなりなから必要である。

けれど、例えは學術研究の
同は合理的批判的精神を主
にもつてゐるが、それは政治
的同様に機動的なものであるか。
美の追求に於いては藝術
の機同もありである。*

(四、一三)

都市化の日本的とアメリカ的

都市化の次の三過程

一、機関の増加

二、未知人と同士の増加

三、合理化

は日本に於ては至るが、アメリカでは

すでに未知人との同化は飽和状態

あり、同化の合理化も極限

をもち極限をいであらう。アメリカに於いては、都市化は市域の

拡大を意味するにすぎない。アメリカ

都市の心があまりとなくゆがみ、同化や機関

の増加といふと思ふ。

的増加を必要としているので、これは

金口民は皆都市的な同化や能

24

都市化は本来農村におきかへて
る現象である。

都市郊外は都市化になつて行くが農村
は都市の拡大現象つまり、特定の
個人土地は都市が出来るまでは都市の
現象と現象である。都市化はなる。農村
都市化は農村が都市に変質して行く
現象である。農村を都市化して行く
都市化はなる。

25

なる。故に都市化は、
ことばでいえば都市の拡大は外に
は先えぬ。五三つはもう農村の
同化や変質は見えないのである。
しかし都市化の過程は本来は農村
の都市化と解さなければならぬ。農村の
同化や変質は農村の都市的
のものに於いてである。
水な。この人の同化も人の心も都
市的に振うたといふかも知れない。
たか、日本も都市化に都市の振

先しまち張つてつと二つもあつて
なにか中々か
大、我、没、以、外、ではな、かも知れぬ。
つまり棉團の増大又は我没が都
市化である。
六月三日

合同主義、党派主義の大勢

他人様より、厚化粧を有物とする。
親法、町村合併、我々の成立し
合同研究の流行、余社の時局を
統。

学界、我々分子分関係。

文部省出版によ
口民社等の研究協力のおかげ

藤本 尺

(第一回研究会 五・二八)

都市化現象の激進地帯を

対照と都市の動的認識

東京のより工業口への移行現象

の一般的理解、日本及び各国

における例の比較

（首都への直結の強化、首都への路線

高橋 尺

日本における経済文化の系譜

戸籍法例を して見る

新旧政府のかけ、引きつぎ内容（人

制、方針、その他）

改革の影響をうける階層人

中心の王造と西洋の政治

口実の民族を新解

合理的地区記号情 兵器の独立

渡り界

日本の口境内に見えぬ多数民族

アイヌ・オロチ・朝鮮人・中国人

白人・毛他（毛皮を食する部）

混血人に因る研究

る例、混血を如何に思ふか

海外移住者による調査

外口料改訂

山下

テリトリーの存在

日本社会主義の存在

生活の楽

東京の生活の楽

日本文化の特色

今日日本は全般的に都市化の途に達し、
近世による合理的文化の建設に邁進し、
のびのびと都市を築いてゐる。町田金井、新市、
巨田、都那の線へ、と進んでゐる。

古くからの日本は古代から中央と東の
根幹の道徳に基いてゐた。この道
徳の為に常に陰謀的で陰險の下
の為に常に表裏が裏、何事も裏切
り、利己的な行動はさせ、陰謀下さ
り、とせず人の顔はかり、行動が
た然るの勢、風気が出来てゐる。ワヒと
かサヒとか保るんなら、下の道徳であ

92 434

既戦は
 18じめ
 2日
 本人は手
 持て
 物を
 考へ
 物に
 を
 知
 り
 か
 少
 半
 子
 様

はたした事代である。

合税式で物を売る物を解するは

こんな楽な事にはないといふ日本人には見

えようである。^{（我々も）}色々の国外にしばらくい

たから日本人は見る所が活潑である

だからか、強いはたしては多かれ又新

録して来たといふであらう。これからは

美事に活潑するであらう。

合税式の利便しては人々には合税

要するに遠くない。合税が活潑す

る物や産業はこれから日本人

の手によるとして、道が振かれよう

くであらう。

我々の日本人を去勢してこれのほかに我々の道徳、君臣の關係、父子の關係の文化である。君臣の關係は天皇でも大君でも主従の主にならぬのは皆然りである。

然り今にも日本はすかす暗れあがっている。これは、日本国民の最上層に皇室一家あって、最底辺に水平社の階層が今にも日本国民の最上層の中にある。これはないか。これ等の兩極がある。同じ日本人の世界には

全く全株式の活動はありはな
然し我々その方針が幾分ほげて来た
大正七〇民の元等に全株式の活動が
さかんになつて来た。

夫婦家制、野村合併、新市
巨大都市圏の出現、口民生活
の合理化のみにあつた路線をた
してつゝ、科学と産業の活動が
顕著なれば、

矢張り文明は合理化の線の上へ進ん
で、西洋文化が本筋の成長を
いふのもつた。東洋の文明は

それ丈でつと成長して行くもの
ではなく各處より合衆化に向き西洋
文明の線に合流する事によつて最も
的を射上げをなすものと考へたのである
私の意見では合衆化といふ事は
文明養成の何事かの代金で
合衆化にもとより東洋的考へは左
に丈で最も不十分成長し得るもので
ある。工業的發展の最も遅延にか
うは合衆よりも非合衆がより高
等の文化と考へた事もあり得たと
考へたのである。そんな條件に處する

姑息の

一時的又特殊の便宜があるもので、常
に最良なものを求めたいならば、全
然のしのであつて、是より、必要あり。

日本人の天分

古代には字が人の心の自はな

活動を拘束し中世には家族道徳

村郷道徳が強制し人の心の自はな

活動を拘束し現代人のハカ自

由のれくゝ台帳帳本の従つて活動

しうゝ様には今も完全にはなつてい

いかだが近ごろ日本人には雲

かといれども大空の下にあるのは千年事

はじめての事である。虫んな色への

物をおもひながら日本人は其の天分を

使ふかに秋はす事かふ事なかな

りである。最近それかす。可成りた

近の如く十八世紀に家祖の道徳を清
 算した。十九世紀からは支配の傳統
 に存してゐる古代の慣習を排除しよ
 うとしてゐる。

日本では家族制を排してゐる古代の
 制度の除きには完うあつてもない。
 只統治支配に同する古代のものか
 しつこく排除せよといふことである。
 だがその時の問題である。
 古代的不合理が残つてゐる同族全權
 の自由な成長は不可能である。

最近日本の世界市場への輸出は定まら

「社会生活」なるものが、自衛隊、船舶、
の工業を度々、自衛隊、映画、作
品、音楽、美術、プロレス等々、あつ
たのは社会生活だ。

社会生活には、常に、家や道徳、
が、全般的に、法則を、活動を抑
えて、格に、^{運動}の、イデオロギーと
して、その、政策が、今の日本人の社会
生活、生活、を、おさえて、全般的に、
あり、その、視、を、さ、先、け、つ、い、の、
た、り、か。

六月七日